

### Ⅲ 看護協会活動への参加意識と参加状況

#### 1 会員意見の反映感

会員は自分達の意見が協会運営に反映していると感じているかを把握するために次のように問うた。「あなたと同じ年齢や地位の会員の意見は、看

護協会の運営に反映されていると思いますか」非常に驚いたことに「あまり反映されていない」「まったく反映されていない」と答えた会員が57.6%も占めた。

図15 年齢別会員意見の反映感

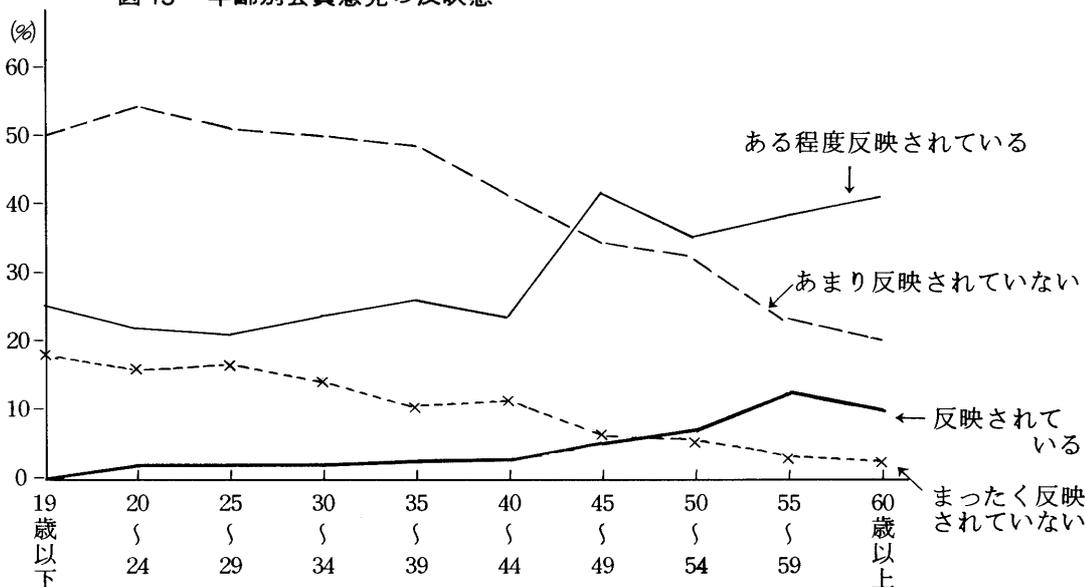
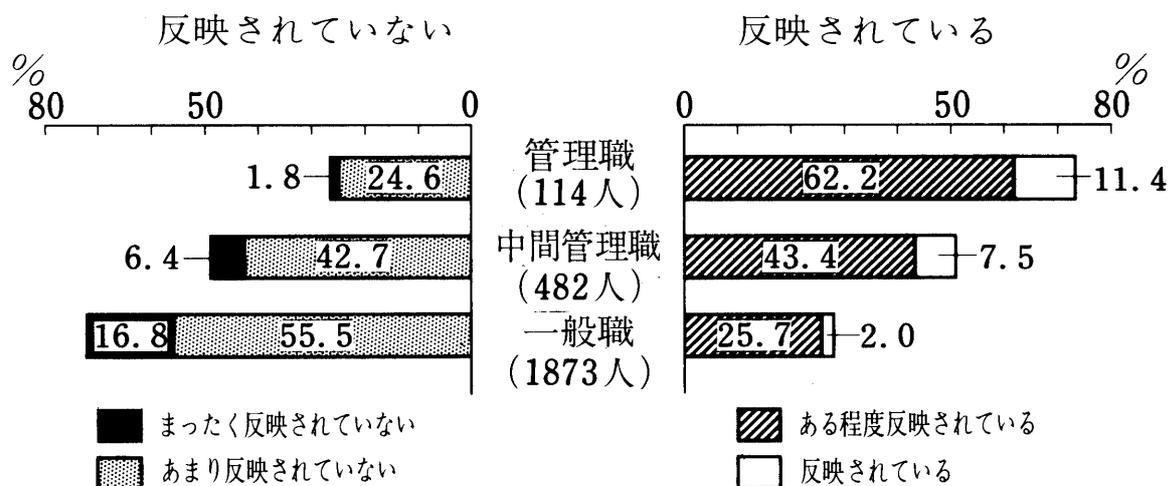


図16 あなたと同じ年齢や地位の会員の意見は、看護協会の運営に反映されていると思いますか



(無回答者を除く)

年齢や地位が低くなるほど自分の意見が反映していないと答えている<図15><図16>。

業務別・勤務場所別では大きな違いはみられなかった。多くの会員は自分達の意見が反映されていないと考えていることがわかった。これは、あくまでも結果であり、これを評論することより何故、このような結果になっているのかを考え、今後の組織運営のあり方を模索することの方が重要である。

そのためには協会活動にどの程度かかわっているのか、協会活動にどの程度関心を持ち、協会活動のことを知っているのか、その実態をおさえることが重要である。以下、この点について調査した結果を報告する。

## 2. 今までどんな活動にかかわってきたか

協会活動とのかかわりをみる上で留意すべきことは、調査時点は、56年10月であり、主に、組織一本化前の三部会時代の活動の実態を反映しているという点である。

特に支部活動は、部会毎に活動していたことに留意されたい。

### 1) 支部活動

いままでどんな支部活動にかかわってきたかを選択肢を設けて聞いたところ<表41>のような結果であった。

「支部ニュース」を読んだことがあると答えた会員がさすがに82.7%にのぼり、参加形態としては一番多かった。

次に多いのが、支部主催の研修会等への参加で7割近くの会員が経験していた。支部における研修活動がいかに重要な位置を占めているかが確認できる。このことは、職能団体としての協会活動の特色を反映している。

三番目に「支部総会への参加」が多い。支部総

会は、形式的には支部会員全員が出席でき、支部活動の決定に参加する最も重要な機会であるにもかかわらず半数以下の参加経験者にとどまった。

上位四つまでは、機会が準備されていてそれに参加すれば良いというかわり方である。支部活動の企画・運営にまでかかわる項目は、「支部委員を務めたり、行事や研修会等の企画・実施に協力したことがある」であるが、17.0%の会員しかかかわっていなかった。会員の多くは、何らかの形で支部活動にかかわっているものの、企画・運営にまで関与している会員は少ないことがわかった。

では、次にどんな属性をもった会員がどんな支

表41 支部活動とのかかわり

支部とのかかわり方	会員数(%)
支部ニュースを読んだことがある	2,428 (82.7)
支部主催の研修会・講習会・学会に参加したことがある	2,046 (69.7)
支部総会に参加したことがある	1,369 (46.6)
看護週間行事や看護大会などの活動に参加したことがある	650 (22.1)
支部委員を務めたり、行事や研修会の企画・実施に協力したことがある	499 (17.0)
代議員に選出されたことがある	328 (11.2)
支部会館の会場・設備を借りたことがある	312 (10.6)
支部の役員・委員に相談したり、会館に問い合わせをしたことがある	300 (10.2)
その他	56 (1.9)
上記のようなかかわりはない	133 (4.5)
被調査者全数	2,935(100.0)

[複数回答]

部活動に参加したことがあるかをみてみよう。

全部の項目について、当然のことながら、会員としての通算経験年数が長くなるほど、参加経験者は増える<図17>。また、職位が高くなるほど、支部活動への参加経験が多くなっており<図18>、これは労働組合とは違う職能団体の特色といえる。

図17 会員としての通算年数別支部活動とのかかわり

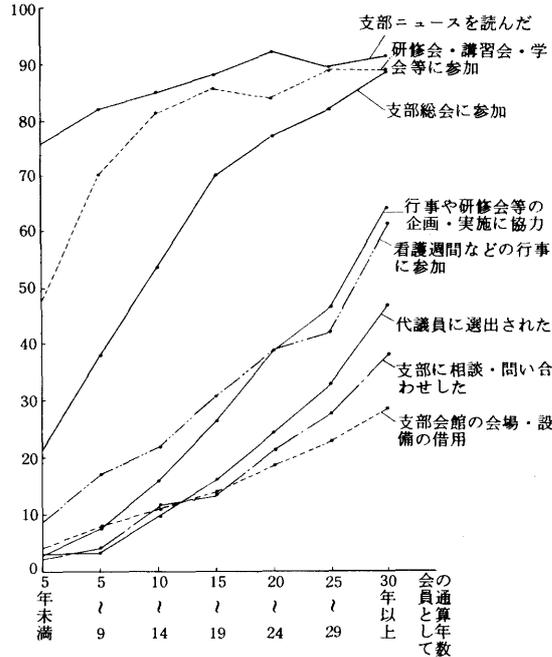
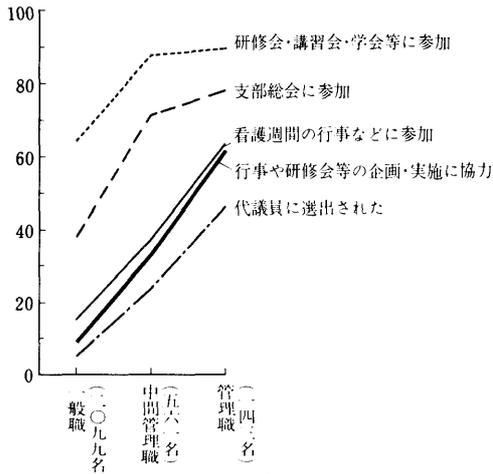


図18 職位別支部活動とのかかわり



もう少し詳しく活動内容別にみてみよう。「支部ニュースを読んだことがある」、「支部主催の研修会等に参加」という活動は、会員になってすぐ、一般職の人も多く経験している。それに比べ、

「支部委員を務めたり、行事や研修会等の企画・実施に協力」という、企画レベルの活動は、会員になってからの期間が長くなり、職位があがるにつれ、急激に経験者の割合が増えてくる。

つまり、会員は、最初、支部ニュースを読み、研修会等の受講で支部活動にかかわり、年がたつにつれ、支部総会、看護週間行事等に参加し始め、代議員に選出されたりする。そして、支部委員を務めたりして、企画・運営レベルにまで関与するようになる。これを、断面的にみると、支部活動の企画・運営は、会員歴の長い管理職が中心になって行ない、そうして準備された事業に、会員歴の短い、一般職の比較的若い会員が参加しているという状況が推測される。

また、業務・勤務場所別にみると、看護教育者、保健婦（中でも保健所保健婦）は支部活動にかかわった人の比率が高い。

看護教育者、保健所保健婦は会員数としては少ないが、準備された活動への参加から、企画・運営まで多くの会員が経験している。

診療所勤務の会員（このうち准看護婦は3割を占める）については、支部ニュースを大半の人が読んではいるものの他の活動に参加したことの少ない。

視点を変えて、支部間格差をみると支部活動への参加経験が支部により大きく違うこともわかった<表42>。

## 2) 本部活動

本部活動への参加の経験も選択肢を設けて聞いたところ<表43>のような結果であった。かかわりの多いのは、学会、総会、教育コース・研修会であり、本部活動においても、研修活動が中心となっていることがわかる。

支部活動と比べると、本部活動にかかわった会

員の割合は少なく、「かかわりはない」と答えた会員が半数近くを占めた。個々の会員にとっては、支部活動の方が身近であることがはっきりした。看護協会活動は会員に身近な支部活動が要であり、本部活動は、個々の支部ではなしえない事業を行ない、支部活動がより効果的に運営されるような役割を果すべきだと筆者は考える。この観点からすると、会員が支部活動の方により多くかかわっていることは、当然でありまた望ましいことである。

表42 支部活動とのかかわり — 支部間格差 —

支部活動とのかかわり	参加者比率		
	参加者比率 最低県	参加者比率 最高県	平均
支部ニュースを読んだことがある	59.2%	97.6%	82.7%
支部の役員、委員に相談したり会館に問い合わせをしたことがある	0.0*	31.3	10.2
支部会館・設備を借りたことがある	0.0*	50.0	10.6
支部主催の研修会・講習会・学会等に参加したことがある	55.2	100.0	69.7
看護週間行事や看護大会などの活動に参加したことがある	4.0	51.4	22.1
支部総会に参加したことがある	28.6	81.3	46.6
支部委員を務めたり、行事や研修会等の企画・実施に協力したことがある	2.1	41.5	17.0
代議員に選出されたことがある	0.0*	27.1	11.2
その他	0.0*	12.5	1.9

〔複数回答〕

\*全数調査ではなく、標本調査であるため、会員数の少ない支部は、回収調査票が非常に少ない（例、山梨県16票）。このため、実態としてはありえない「0.0」という結果が出ている。支部間格差を調べる目的の調査ではないので誤差が大きいがおおよその傾向をみるために掲載した。

表43 本部活動とのかかわり

本部とのかかわり	会員数 (%)
日本看護学会に参加	1,041人 (35.5)
本協会通常総会に参加	762 (26.0)
本協会主催の教育コース・研修会に参加	635 (21.6)
本部会館を宿泊等で利用したことがある	369 (12.6)
本部図書室を利用したことがある	272 (9.3)
本協会主催の会議・行事に参加	224 (7.6)
協会役員・委員・事務局に相談したり問い合わせ	118 (4.0)
本協会委員を務めたり行事・研修会の企画に協力	62 (2.1)
看護事情視察団に参加したことがある	23 (0.8)
その他	43 (1.5)
かかわったことはない	1,338 (45.6)
被調査者全数	2,935 (100.0)

〔複数回答〕

ただ、それにしても、企画レベルでかかわった会員（「本協会委員を務めたり、行事や研修会等の企画・実施に協力したことがある」と答えた会員）が、僅か2.1%であるというのは、低すぎる。一部の会員でしか本部運営がなされていないということは問題である。

ところで、本部運営が東京中心になっていないかどうか重要なことなので、この点についてみ

てみよう。

本部活動とのかかわりは、東京近辺の会員の関与率が確かに高いが、それほど極端ではない。例えば「本部図書室の利用」は一番高い東京で25.7%（平均9.3%）、「通常総会参加」は、一番高い埼玉で42.3%（平均26.0%）である。企画レベルの「本協会委員等」の経験が一番高い東京で8.0%（平均2.1%）であった。

ただし、人数で見ると、そもそも東京、千葉、埼玉、神奈川4県の会員数が多いことも相まって、次の二つの活動は、4県の会員の占める割合が多かった。一つは、企画レベルの「本協会委員等」で、4県で38.7%を占めており、もう一つは、「本部図書室の利用」で、4県で28.7%を占めた（調査票割合は13.7%）。本部活動に関与する会員が東京近辺の県に多いのは、仕方がない面もあるが、本部活動を企画・実施する者は、この点に常に留意し、東京中心の事業にならないよう出来るだけ配慮する姿勢を持ち続けなくてはなるまい。

では、次に、どんな属性をもった会員が本部活動にかかわっているかをみてみよう。

支部活動と同様に、全部の項目について、会員としての通算経験年数が長くなるほど、又、職位が高くなるほど本部活動への参加経験も多くなっている<図19><図20>。本部活動と何らかかわりのない会員は、会員歴5年未満だと7割を占めるのに、9年未満で半数となり、それ以上、会員歴が長くなるにつれ、激減していく。

業務別に活動内容をみると、看護教育者は本部活動においても全項目においてかかわった経験のある者が他業務の者より多く、かかわりの全くない会員は約1割である。保健婦は、本部総会参加経験者が33.3%で会員全体の平均より若干多い。助産婦は、「本協会主催の教育コース・研修会」参加

者が33.3%で会員全体の平均より多い。准看護婦は、かかわりの全くない会員が6割以上を占め、支部・本部活動とも疎遠であることがわかる。

図19 職位別本部活動とのかかわり

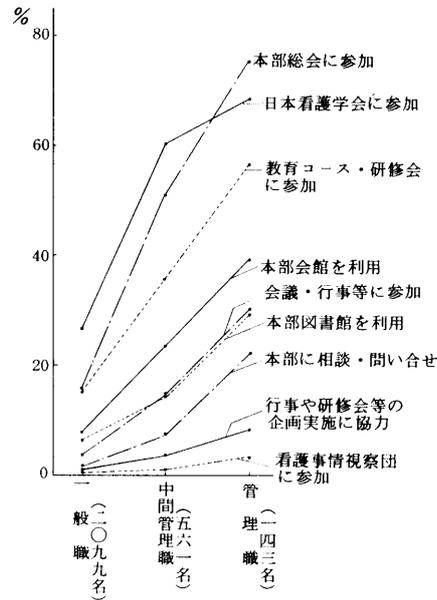
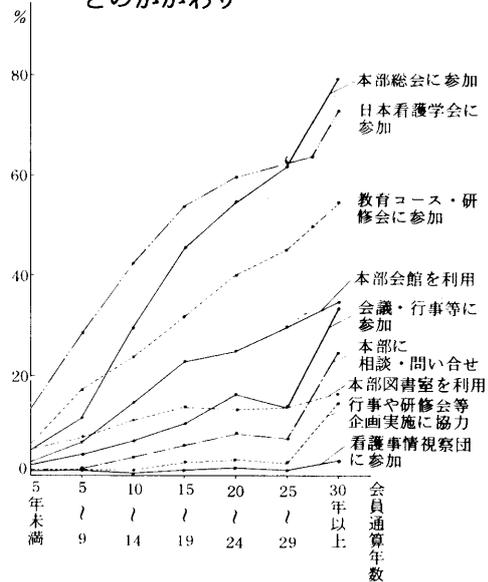


図20 会員としての通算年数別本部活動とのかかわり



### 3. 看護協会資料の活用状況

機関紙等の資料は、組織活動上及び業務上の情報源、研修材料、討議材料として重要なものである。これらの資料がどの程度会員に読まれているかは、一面では会員の協会活動への関心度を表わすと同

時に、情報の伝播度・有効性の目安ともなり、組織内広報活動、出版活動等を考える上でも重要なので、機関紙を始め、代表的資料五つについての程度読んでいるのかを聞いた。

1) 機関紙「協会ニュース」

機関紙「協会ニュース」は、全会員に送付される唯一のもので、会員と協会を結ぶ最も重要な資料である。その内容は、本部活動の報告など組織活動上必要なトピックスを中心に、日々の業務を広い視野で把握するための情報、研修会のお知らせなどを含んでいる。

さすがに、「よく読む」「まあ読んでいる」と答えた者が、それぞれ26%、50%おり、協会活動にある程度関心が払われていることがわかる。

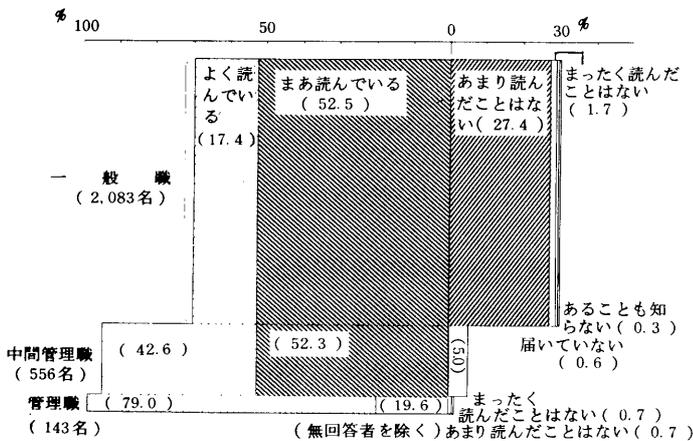
属性別にみると、会員年数が長くなり、職位が高くなるほどよく読んでいる<図21>。管理職の8割は「よく読んでいる」のに比べ、一般職は「まあ読んでいる」会員が一番多く半数を占める。

業務別にみると、看護教育者、次いで保健婦が比較的好く読んでいる。

管理職など、協会活動の参加経験も多い人は、ほとんどの記事に目を通すが、一般職は、関心の

1 ○ ある記事だけ読んでいるものと推測される。

図21 職位別機関紙「協会ニュース」の活用状況



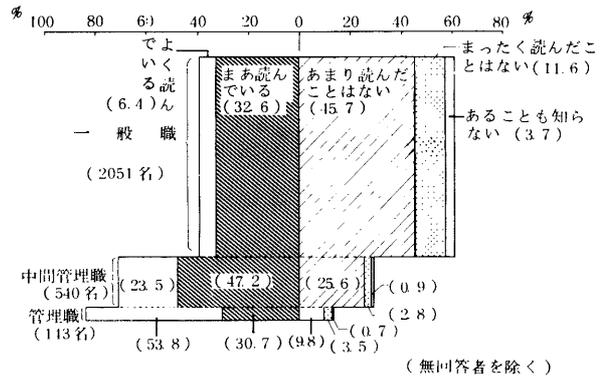
また、協会ニュースは、組織活動上必要不可欠なものであるから、各会員の手にわたることは、組織運営上非常に重要なことである。調査結果では、「届いていない」「あることも知らない」会員もそれぞれ0.5%、0.2%と少数ながらおり、数は少ないが発送段階で問題がある。住所変更の届出がなされず、支部作成の配布先名簿が不備になったか勤務施設に一括して送られたものの本人の手まで届かない状況があるのであろう。

2) 機関紙「看護」

機関誌「看護」は、会員が自分で購入する雑誌である割には、「よく読む」「まあ読んでいる」会員がそれぞれ12%、34%と合わせて半数近くを占めた。ただし、機関誌という性格を考えると、更に購読者を増やすための対策を考える必要がある。

「看護」も、会員年数が長くなり、職位が高くなるほど、また、看護教育者によく読まれている。ただし、人数で見ると、読んでいる会員の過半数は一般職である<図22>。

図22 「看護」購読状況



3) 「日本看護学会集録」

「日本看護学会集録」は、「よく利用している」「まあ利用している」会員が1/3を占め、会員の研究活動に十分利用されていることがわかる

<表44>。

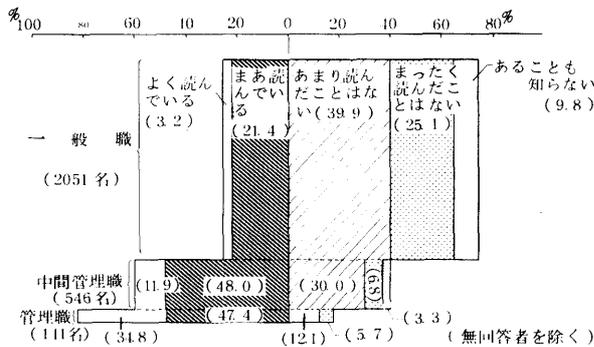
表44 「日本看護学会集録」利用状況

「日本看護学会集録」利用状況	会員数(%)
よく利用している	266人(9.1)
まあ利用している	771(26.3)
あまり利用したことはない	1,093(37.2)
まったく利用したことはない	498(17.0)
あることも知らない	210(7.2)
無回答・不明	97(3.3)
合計	2,935(100.0)

4) 「ILO看護職員条約に関する資料」

この資料は、本会の運動が5年前に開始されてからのものであるが、既に1/3以上の会員が読んでおり、ILO看護職員条約・勧告の情報が、着実に会員内に普及してきていることがわかる<図23>。これは、本会学習会活動の結果である。(労働組合の取り組みにより啓発された面もある。)ここまで普及してきた段階でILO看護職員条約批准ならびに勧告適用促進の運動は、会員内の普及活動だけでなく新たな段階を迎えていると予想される。

図23 「ILO看護職員条約に関する資料」購読状況



5) 「日本看護協会調査研究報告」

現在までNo.18まで刊行されたが、各No.共約1,000部の発行部数にもかかわらず、1/4の会員が、「よく読む」「まあ読んでいる」と答えている。支部、看護学校の図書室等、多くの会員の利用しやすい場所に配布していることが、利用率を高めたものと思われる。

4. 看護協会運営への関心

看護協会活動とりわけ運営について会員がどの程度、関心を持っているかを把握するために、組織の一本化についてと、代議員の実際の選び方について知っているかを聞いた。

1) 組織一本化について

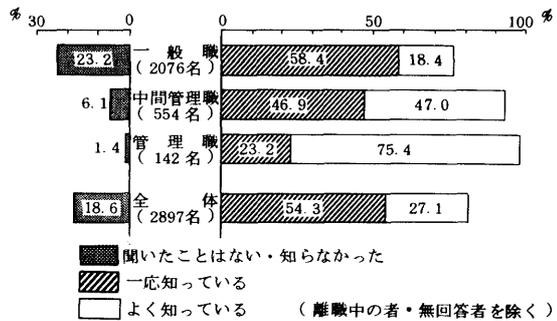
看護協会は、最近まで、保健婦、助産婦、看護婦(昭和37年より准看護婦も含まれる)が、3部会を結成し、活動を展開してきたが、昭和56年度より、部会制を廃止、組織を一本化した。これにより各職能特有の問題は各職能委員会で検討されることになった。この組織変えにより、会員は活動の仕方を変更せざるをえなくなったわけで、組織活動上、歴史的に重要な組織改正である。

組織改正については、数年間、協会ニュースでも取り上げられ支部討議、総会討議等がなされてきた。組織改正は、会員全体(とりわけ少数グループの保健婦、助産婦)にとって関係する重要なことである。このことを会員がどの程度知っているかは、組織運営への関心度を把握する上で、良い指標となると思われる。

結果は、8割の会員が知っていた。周知の程度を詳しくみると職位別、業務別で周知度が大きく違っている。

まず、職位別では、管理職は「よく知っている」

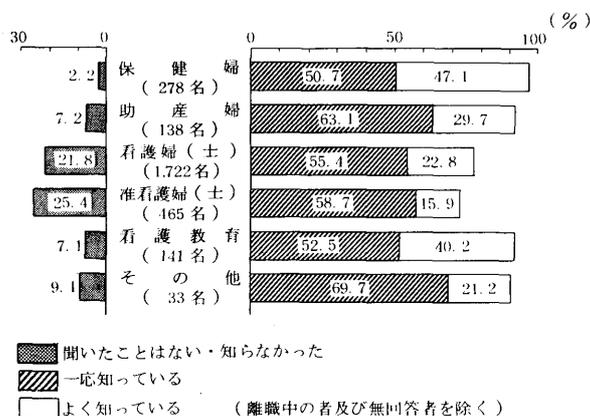
図24 職位別組織一本化の周知度



者が多いが、一般職では「一応知っている」程度の者が多い<図24>。管理職の方が、協会運営に関心を持っていると考えられる。

業務別では、保健婦・助産婦は「聞いたことはない・知らなかった」と答えた会員は数%と少ない<図25>。少数グループである保健婦・助産婦は「大きな組織に組み込まれることによって少数者の意見が反映しなくなるのではないか」という危機意識をもったため、組織一本化については特に関心が強かったものと思われる。

図25 業務別組織一本化の周知度



## 2) 代議員選出過程について

各支部では、会員100人について1人の割合で本部総会での議決権をもった代議員が選出されている。代議員は協会活動の重要事項を決定する任を負うわけで、総会出席にあたり「支部会員の意見を聴取して出席し議決事項について支部会員に報告する」任務がある。このように代議員は支部会員一人一人にとって意見を反映させるルートとして重要な役割をもっている。この代議員を実際にどのように選ぶか知っているということは、組織運営への関心の強さを示すと同時に、代議員選出の過程に関与する可能性、ひいては意見反映に

関わる可能性が高いことをも示している。

結果は、驚くべきことに回答した会員の7割が「知らない」と答えた。支部総会で選挙されるとはいえ、この段階では既に形式的承認となるので、多くの会員の知らないまま代議員が選出されているという状況である。

しかし、職位別にみると、大きく違う。管理職の3/4は「知っている」と答えている<図26>。管理職は、組織運営に対する関心が高いと同時に、代議員選出に何らかの関わりを持ち、意見を反映させる可能性が高いと考えられる。

業務別では、保健婦、看護教育者に「知っている」人が多く、組織運営への関心の高さを示している。保健婦は、組織一本化について関心が高いことから、組織運営に関心が高いと思われる。また、実際に支部活動との関わりも多いことから、保健婦部会では、多くの会員が関わる形で活動が行なわれていたものと推測される。

図26 職位別代議員選出過程の周知度

